

# AI時代における Analytical Sciences 誌, その一歩先へ



加 地 範 匡

Analytical Sciences 誌は、1985年の創刊以降、紆余曲折を経て2020年にIF=2の壁を突破、2022年からはSpringer Nature社に独占的出版権を設定することで、名実ともに国際科学論文誌としての地歩を固めつつあります。これもひとえに先任の小澤岳昌先生、長谷川健先生が主導されてきた編集委員の先生方の努力の賜物であり、改めて感謝申し上げます。日本分析化学会の基幹欧文誌として、今後のさらなるプレゼンス向上という大任を仰せつかることになり、身の引き締まる思いです。現在、一時のIF至上主義は落ち着きを取り戻しつつあるとはいえ、IFは学術雑誌の共通評価軸ともいべきものであり、*Anal. Sci.* 誌が国際的なプレゼンスを向上し、多くの読者を惹き付けるためには今後もIFの維持と向上への努力が必要不可欠です。引き続き会員の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

さて、昨今のChatGPTに代表される対話型AIの発展は目覚ましく、日進月歩どころか「秒針分歩」の勢いです。特に書籍のような著作物は著作権の再考を迫られており、科学論文誌もこの潮流に抗うことはできません。*Anal. Sci.* 誌においては投稿された論文は審査前に剽窃<sup>ひょうせつ</sup>チェックを行っておりますが、いずれChatGPTにより生成された論文が投稿され始めると、この剽窃チェックをも回避した論文が投稿されるようになることは想像に難くありません。このような状況のもと、われわれ分析科学研究者としてできること・すべきことは何なのかを原点に立ち帰って再考する時期に差しかかっています。研究のオリジナリティと新規性は何か、という研究の本質を極めることはもちろんのことですが、人にできてAIにできないこと、それは老子の「天下万物生於有、有生於無（天下の万物は有から生まれ、有は無から生まれる）」が的確に表現しているように思います。「有生於無」のような研究は何から生まれるのか、それは分析化学会の学会活動を起点とした幅広い国際的な人的交流に尽きるのではないのでしょうか。すなわち、分析化学会年会・討論会をはじめとした学会発表という「場」において初対面の研究者同士が議論し、休憩時間・懇親会等でいわゆる雑談を交わすことが新しい研究アイデアの源泉となり、お互いの「人となり」を理解することができます。その結果、論文に投稿された紙面上の内容だけでなく、論文著者らがどのような研究経験に基づいて何を科学的未解決問題として認識し、それに対してどのようなアプローチをとり、得られた結果をどのように解釈したのか、という行間を読み取ることにつながります。もちろん科学論文誌においては、行間を読み取る必要があるような書き方は良くありませんが、*Anal. Sci.* 誌の審査をご経験された方はすでにご承知の通り、Comments to the authorでこちらの意図を伝えようとしても、なかなかこちらの真意が的確に反映されたrevise原稿は返ってきません。これはひとえに、語学を超えたところ（教育背景や文化的背景に基づく考え方）に原因があるためで、もしも著者らと親交があれば、より良いrevise原稿作成のためにComments to the authorを通じた著者らへのアプローチの仕方も変わったかもしれません。このことから分かります、AIにできない仕事を行うには、「人」とのつながりを前提とした学会発表と論文投稿、さらにはそれらがリンクして相互に盛り上げていくシナジー体制構築が重要です。

先日開催されたアメリカ化学会のAnalytical Chemistry誌Advisory Board Meetingにおいても、Machine Learning/AIといったEmerging topicsをどう扱うかが議論されました。古代ギリシャのアゴラに端を発する集合知<sup>はうち</sup>の究極の形が対話型AIと思われませんが、現代社会では集合知が多くの危険を孕んでいることも実証済みです。情報科学の行き着く先と分析科学が目指すべき未来は世界中の分析科学者の関心であり、これは決してEditorial boardだけが考えるものではなく、会員の皆様全員が当事者として考える必要がある重要な課題です。是非、荒波超えて未知の世界へ漕ぎ出そうとするEditorial boardに、忌憚のないご意見をいただけると幸いです。

〔Noritada KAJI, 九州大学大学院工学研究院, 「Analytical Sciences」編集委員長〕